慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ウヰリアム・モリスの共産主義（三、完）
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.10 (1922. 10) ,p.1447(73)- 1458(84)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19221001-0073

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ること、勞働の外何物も費されあらざること、又その何故に然るかを說明する爲めに充てられてゐるにも拘らず、價値と勞働との間には何等客觀的關係はないのである。

勞働も亦彼れは經濟學者の場合に於けると同じ形の儘之を承認して居る。否なそれすらもして居らぬといふのは、勞働の强度の差が兩三語を以て指示せられてゐる外には、勞働は極く一般的に、費用をなすもの、價値を測定するものとして引用せられて、それが標準的なる社會的平均條件の下に於て投下せられてゐるか否かは顧みられて居らぬからである。生產者が一日にして造られ得る生產物の製作に十日を費してゐるか否か、最良の道具を用ゐて居るか、最惡の道具を用ゐて居るか、その勞働時間を社會的に必要な貨物に對して社會的に必要な數量に於て投じてゐるか、或は全く不要の貨物を作るか、それとも需要ある貨物を需要以上又は需要以下に作るか。凡て是等の點に干しては全く論ぜらるゝところがない。勞働は勞働である。同じ勞働の生產物は同じ勞働の生產物と交換されなければならぬのである。平生は、その時宜に適すると否とを問はず、直ぐに國民的見地に立つて、一般的社會的望樓の高みから個々生產者の狀態を概觀しようとするロオドベルトスが、此場合には特に努めて之を避けてゐる。而して其譯けは彼が其書の第一行から直ちに勞働貨幣のユウトピヤに直進するからで、而して苟も勞働の價値形成力の吟味は、如何なるものも皆此航路の障害となるからである。此處では彼れの本能はその抽象的思考力よりも力强いのである。

然らば商品をして例外なく、其勞働價値に應じて相交換せられしめる方法はと云へば、ロオドベルトスの場合にはそれは甚だ簡單である。同じ派に屬する自餘のユウトピストはグレエからプルドンに至る迄、皆な少くも經濟的問題は經濟的方法で、商品交換當事者其人の行爲に依て、解決しようとして苦心してゐるが、ロオドベルトスは善良なる普魯西人として直ちに之を國家に訴へる。國家の命令が改革を命ずるのである。

斯やうにして價値（少くも一部分生產物の價値）を制定した上で、國家は其勞働貨幣を發行し、工業資本家にそれで貸附をすると、資本家はそれで勞働者に賃銀を支拂ひ、勞働者は收得した勞働紙幣で生產物を買ひ、斯くして紙幣は其の最初の出發點に還流するといふのである。此事が如何に美事に行はれるかはロオドベルトス自身の言葉に聽かなければならぬ。（未完）

ウヰリアム・モリスの共產主義（三、完）

加田哲二

八

次に共產主義社會における勞働の狀態を見る。資本主義の賃銀勞働はすべて嫌惡すべきもので、その勞働の主要動機は經濟的强制である。勞働に對する本來の刺激は確かに必要そのものである。乍然、勞働に伴ふ感情の方面を見ると、精力行使の快感がある。勞働發達の經過を見ても、もし人爲的並に特權的强制が存在しないものと假定すれば、勞働の快樂は、その苦痛に比して增加して來る。例へば自然の狀態における馬は驅馳するを喜び、犬は狩獵を好む。普

通の狀態の蠻人生活にあつても、あるひは儀式を行ひ、武器の裝飾を作り食物獲得の過程にあつても、その快樂を求めやうとする。吾々が歷史を學んで茫漠たる原始草昧の時代から初期野蠻時代に入ると、勞働における喜悅は新しい刺激を受け、到るところにおいて有用な職業となるに至つた。さうして更らに一段の進步によつて必要な勞働が快樂となることによつて藝術は生れたのであつた。吾々は藝術發達の傾向を迹ることによつて共產主義社會における勞働の地位を確定することが出來る。

野蠻時代から初期文明時代に入ると勞働における悅樂は二つの方法によつて表現されることとなつた。モリスは藝術を分つて精神的藝術（Intellectual art）と裝飾藝術（Decorative art）に分つてゐるが、（Art under Plutocracy. Collected Works. vol. XXIII pp. 165-166）今こゝに云ふのは裝飾藝術である。この裝飾藝術はその發達の過程において、二つの表現形態を採る。その一は附屬的藝術（Adjective art）であり、その二つは本質的藝術（Substantive art）である。附屬的藝術とは家屋から衣服針に至るまでの耐久的な日常の貨物の生產における悅樂として無意識に發達した藝術であり、本質的藝術とは工匠craftmanship の作品であつて、その存在の理由が一の藝術品たることに存し、ある一定の意義または構想を傳へた藝術を謂ふ。

ギリシア文明にあつては、本質的藝術は最高の發達を遂げ、附屬的藝術は萎靡振はない狀態にあつた。ローマの專制時代に至るとギリシアの本質藝術も生命のない型に嵌まつた古典主義と化して、古代社會の崩壞の時に及んだ、さうして野蠻生活の新らしい接觸は古代社會の狀態を全然改變し、本質的藝術は全く影を沒して、附屬的藝術が一世を支配した。吾々の必要に應じた新しい建築はこの時代の產物であつた。さうしてこの偉大な附屬的藝術は中世紀の初期において殆んど完成し、第十三世紀の中葉に至つて、その頂點に達した。この時期に至つて新らしい本質的藝術は更らに誕生發達すると共に中世における建築藝術は徐々として、崩壞するに至つた。文藝復興と宗教改革とは更らに大きな變化を社會に齎らしたが、その結果として附屬的藝術は滅び、目的を意識しない、たゞ智識と手先の技巧を示すに止まつてゐる本質的藝術が榮えたのである。この結果は何を生んだか。本質的藝術は種々多樣に發達して上層階級に快樂を與へたが、勞働者に對するすべての藝術を滅ぼし、その結果として勞働者から高級藝術を鑒賞する能力とこれを生產する機會とを奪つたのである。事實において、民衆藝術と民衆宗教とは新らしい社會組織には不適當であり、從つて新らしい資本主義の社會は、これらのものを滅ぼしたのである。かくて勞働の喜悅は現在の社會には存在しない。歷史と藝術とを研究する人の稀な現在の經濟學者が、眼前の事實から推してすべての勞働は苦痛で、從つて怠惰なる多數者には必然的に一種の强制が必要であると主張するのに何等の不思議はない。けれどもモリスの見るところを以てすれば、すべての勞働は必ずしも苦痛ではない、既に吾々が述べたやうに（本誌第十六卷第三、四號拙稿ウヰリアム・モリスの勞働論參照）勞働はこれを享樂することが出來る。さうして共產社會における勞働は人生に貢獻するものでなければならない。換言すれば「生產に價しないやうなもの、または生產者を墮落せしめるやうなものが、人間の勞働によつて作られてはならない。」（Art and Socialism,

Collected Works. Vol. XXIII p. 205）と同時に「勞働それ自體が、これを行ふのに快樂でなければならない。」（Art and Socialism p. 201）即ち「第一價値ある仕事、第二に仕事が愉快であること、第三に仕事が過度に心身を疲勞せしめないやうな狀態の下においてなさるゝこと、これらの諸條件を供へた勞働をすべての人が持つことが正しくあり、且つ必要である。」（Art and Socialism p. 209）斯くの如き仕事を持つことは、洵に勞働者の生得權である。然らば如何にすれば勞働は愉快たることを得るか。それには三つの要素がある。第一、勞働に變化のあること、第二創造の希望のあること、第三勞働に對して自尊心を有することの三要素である（Art under Plutocracy. Collected Works. Vol. XXIII p. 174）更らにモリスはシャアル・フリエに倣つて、勞働享樂化の六條件を擧げてゐる。即ち（一）生活の心勞を除くこと、（二）勞働の强度に比例して勞働時間を短縮すること、（三）勞働の性質が單調なる場合には、仕事の種類を多くすること、（四）適當なる機械の使用、（五）各人の能力と性質とに適する仕事を各人に選擇せしめる機會を與へること、（六）裝飾を加へることによつて勞働を愉快ならしめることがこれである。（Socialism, its Growth and Outcome. pp. 226-230）

九

個々の藝術の部門は如何になり行くであらうか。先づ建築である、建築がモリスに對して重要な藝術的並に社會的意義を持つてゐたことは、彼が一時建築家ストリート氏の弟子となつたことによつて明かであらう。モリスは建築を以て藝術の中心とした。彼はこれを以て、附屬的藝術と本質的藝術とを合體聯結すべきものと考へ、完全なる建築は眼の感覺に訴へるすべての藝術を包含するものとした。建築は一つ綜合の藝術である。故に協働を基本とする社會においては、確かに最も重要な藝術である。共產社會における建築の傾向は大建築であらう。さうして建築はすべての藝術の中で、適當な裝飾を加へることによつて、勞働の喜悅を最も深く味ひ得るものである。彫刻は過去におけるが如く美しい建築物の一部と看做され、さうして實用的の建築を一の大藝術的創造と化すべき最高の美の表現となるであらう。

繪畫は主として公共的の建築物の裝飾に用ゐられる。周期的の國際戰爭、團體並に個人間の競爭の存在しない社會狀態あつては、この藝術は――少くともその畫題において――影響せられ、その獨立的重要性は減ずるであらう。文學は平和で幸福な社會が續いてゐると材料の缺乏のために死滅するかも知れない。何となれば種々多樣な現代小說の材料は、僞善的の道德に包まれてゐる現代社會の富の不均等から生ずる色々な不祥事から取つて來る。小說の主人公を惱まして、波瀾曲折を生ます材料は世間の不合理な出來事である。共產社會では不合理な現象が甚だ少ない。從つて小說の種がなくなる。けれども文學の前途は悲觀するには及ばない。ホーマーの詩以來殆んど變化のない詩歌藝術の發達を限定しまたは豫想することは出來ないからである。科學も共產社會によつて多大の影響を受けやう。これまで利潤追究の用具と思れて來た科學が眞理そのものゝために研究せらるるであらう。

音樂は何うなるであらうか。近代の音樂は中世紀の終において、重複旋律法の發達と共に發達し來り、第十八世紀並に第十九世紀に至つて

長足の進歩を遂げた。古典的音樂は第十九世紀の中頃にその發達の頂上に達してゐたが、世紀後半におけるリヒヤート・ワグナアによつて行はれた音樂革命によつて、大變革が齎らされ、現在までその影響の下に立つてゐる、吾々（モリス）は音樂の將來における發展に就いて豫測することは出來ないが、共產社會においては長歩の進歩をするものと思ふ。最廣義における音樂と建築とは共產社會において最も行はれる職業だらうと思ふ。何となれば、音樂はその奏樂の方面においては――作曲の方面においては音樂は繪畫よりも個人的であるが――協働的だからである。一面においては音樂と他面においては文學と交渉を持つてゐる劇に就いて一言すると、劇はその演出の方面において協働的である。劇は一定の時間と場所で演出する約束に從はなければならないが、劇作に至つては他の藝術におけるほどの訓練を要しない。故に劇は共產社會にあつては、今日よりは一層容易に愉快に取扱はるゝであらう。（Socialism, its Growth and Outcome. pp. 231-234）

現時の教育は階級的教育である。利潤追究を最高の理想とする職業的教育である。共產社會の教育は階級教育、職業教育でなくて、自由教育である。モリスは自由教育を主張する。各人の智能と傾向とに從つてこの世に存する智識を學び、各人の人生に貢獻するものでなければならない。各人がこの內的傾向に從つて、その智能を善用するところのものでなくてはならない。この意味において何人もその生存してゐる間は、その教育を終らない。即ち人生が教育の過程とならなければならない。さうして教育上の效果を擴めて行くためには、圖書館學校等の設備が優秀であるべきは勿論である。（How we live and How we might live. Signs of Change. Collected Wo.ks. Vol. XXIII p. 18. Socialism, its Growth and Outcome. p. 238）

一〇

以上の精神的、藝術的方面に對して產業並に都市の問題は如何に解決せらるゝであらうか。モリスは現代文明の嫌惡者である。殊にその產業主義の野卑低調を憎む。さうしてその表現である工場の不潔並に非藝術なことを排しやうとする。すべてのものが人間の幸福と快感とを基礎としてゐる共產社會においては、產業主義による一國の墮落は許さるべきではない。もしその產業が社會生活に必要缺くべからざる種類例へば製鐵所の如きものであるとすれば、吾々はその災害を最小の程度に止めなければならない。それには二つの方法がある。その第一は嚴密に區域を設けられた小地方に、一定時を勞働する自發的志願者を集め、さうしてこの區域內においてのみ、その產業を行ひ、他の地方にこれを及ぼさないことである。第二には廣大な地域に、小規模產業を普及し、全社會が僅少な割合においてその災害を甘受することである。

次には都市の問題がある。現代の都市には、少くとも二つの種類がある。その一は產業の中心地で、他は中央集權政府の所在地である。前者の好例は、マンチェスタアである。工業とこれに關聯する商業とが、その主要な存在の理由である。後者の中央集權政府の所在地は、大抵金融の中心地、學問藝術の中心地である。この二種の都市は共に巨大な人口を有してゐる。さうして共產社會は大規模工業を斥け、中央集權的大國家を排するので、斯くの如き巨大な都市を必要としない。故に將來における都市は快適な住

居を基本として計畫されなければならない。さうして現在の都市を共產社會に適應するやうに改造するのには、少くとも三つの方案がある。その第一は現在の大都市をその儘存置して、一定の面積における人口を制限することである。さうして都市の淸潔と空氣の流通とを完備し、住居を圍らすに庭園を以てする。高尙な建築を興し、劇場、圖書館、職場、料理場等のあらゆる敎育的施設を設ける。この種の都市は、その內部における生活狀態は甚だ現在の都市とは異つて來るが、都市の面積とその施設の外面的部分においては異らない。各個人また團體が來り住むことも、移住することも自由である。けれども一個人が一定の面積以上に占有することは許されない。第二は現在の無組織な無政府的な都市を實際的に廢止し、さうしてこれに代へるのに舊時の英國大學都市の計畫の如きものを以てする。この都市の面積は、それぞれの便宜に從つて決定せられるが、一般的傾向としては現在の小都市位の廣さとする。第三の說は、都市を社會生活上の中心地で、公共的建築物のある小都市とする說である。この公共的建築物を中心として、一帶の家屋が續き、その數が段々と減少し、遂に田園に達する田園の間には大學だの、住居だのが散在する、要するにモリスの都市論は、田舍對都會の對立を除去し、一が他の生命を枯渴さすやうな制度を否認し、その產業の意見と同じやうに小規模な藝術的都市を推稱する。「無何有鄕消息」の中に描かれたところの生治は、田舍對都會の區別のない社會である。(Socialism, its Growth and Outcome. pp. 234-238)

「以上述べて來たところでは、吾々は單に實現後の社會主義の一般的原理のあるもの、並にこれらの原理から最も手近に考へ得られる生活の一面を取扱つたに過ぎない。けれども吾々はその信ずるところを明かにしやうと企てた。新社會においては何人も誤まつた義務の念に妨げられないので、すべての人は確信と心の平靜とを以て、その行爲を規定する博大な理想を持つことが出來るだらう。彼は先づ第一にこの肉體的要求の充足に快樂を發見し、さうして更らに、人が健康であり、激烈な競爭にその智能を空費してゐない時には、必ず起つて來る知的、道德的並に審美的要求の充足にその快樂を見出すであらう。彼は生活するためには、常に勞働することが必要である。けれども彼はその勞働を彼の仲間と同じ割合で分擔する。それのみならず人間の自然に對する支配を利用して過勞から彼を救ふことが出來るだらう。他の勞働に就いては、彼は人間の諸能力をよく觀察し、機會を巧に利用することによつて、その精力の愉快な行使とするであらう。かく閑暇と勞働の間に、彼は幸福な生活を送ることが出來る。さうして彼はその生活を惡德として罪せられることなくまた現在の倫理思想では富裕階級の有識者に屬する人々に悲哀を與へるやうな心持なく享樂することが出來る。

「外界の狀態に關しては、將來の社會は非常に富裕なので、有用品のみの生產に費されてゐる勞働を割いて、人生の向上に資するやうに用ゐる。故にすべての生產は秩序正しく、淸潔な方法で行はれる。さうして地上は、人間の勞働と住居とによつて破壞されないで、反つて美化される。他の專制もまた顚覆されて巨大な人口の稠密な大都市に住居する强制から解放される。吾々の住居とその周圍とは合理的に施設せらるゝであらう。

「敎育は最早氣の進まない小兒や、敎育よりも外のことを望んでゐる靑年に無理に詰込むと云ふやうなことはしないだらう。さうして最大の自然的能力を持つてゐる人々に對しても、敎育は人生の最も眞面目な行事となるであらう。斯樣な生活は科學者または劣等な人で、新社會の反對者が、「社會主義の專制」として描いてゐるところとは反對である。然し乍ら吾々は、すべての人に對して一般に幸福であり、奴隸狀態からの解放を意味する斯樣な生活が世の中に必然的に行はれることを信ずる。然かも、世界は、そが從はなければならない徐々な自然の强制を全然意識しない。さうしてこの結果非常に世界が利益せらるゝことも未だ知つてゐない。

「吾々は以上述べて來たところで屢々進化の學說を說いたので、社會主義は次に何に進化するかと諮問せらるゝだらう。社會主義は人間進化の終止を否定する、さうして吾々の考へてゐる社會主義の特殊形態は、吾々の未だ考へ及ばない新らしい高級の進展の前には、その地位を讓らなければならないと答へるのみである。これらの發展は、現在の鬪爭が未だ終らないので吾々は知ることは出來ない。現在の鬪爭における最終の目的は吾々がこゝに論述した社會主義（共產主義）である。吾々は人間の理想または靈感に何等の制限を設けやうとはしない。乍然、吾々が豫見する社會主義――人間として未だ嘗て達したことのない合理的な幸福と愉快な勞働とに向上させることを保證する社會主義（共產主義）は、吾々の靈感のための理想としてまた吾々の行爲に對する刺激として充分である。」

(Socialism, its Growth and Outcome. pp. 238-241)

さうして共產社會の理想は現時の社會的鬪爭の中に發見することが出來る。モリスは歌つてゐる。

Lo, we wade the tangled wood,
In haste and hurry to be there,
Nought seem its leaves and blossoms good,
For all that they be fashioned fair.

But looking up, at last we see
The glimmer of the open light,
From o'er the place where we would be:
Then grow the very brambles bright.

So now, amidst our day of strife,
With many a matter glad we play,
When once we see the light of life
Gleam through the tangle of to-day.

――Drawing near the light. Poems by the way　Collected Works. Vol. IX.

吾々は現時の錯綜混亂せる社會的鬪爭の中に輝く一道の生命を看るときに、歡喜する。曙は來た。日は近づきつゝある。吾々はすべての愚昧を捨てゝ進まふとする。

Come, then, since all things call us,
the living and the dead,
And o'er the weltering tangle
a glimmering light is shed.

Come; then, let us cast fooling,
and put by ease and rest,
For the Cause alone is worthy
the good days bring the best.

Come, join in the only battle
wherein no man can fail,

Where whoso fadeth and dieth,
yet his deed shall still prevail.

Ah! Come, cast off all fooling,
for this, at least, we know:
That the Dawn and the Day is coming,
and forth the Banners go.

— The Day is Coming. Poems by the way.

（一九二二・九・六脫稿）

自然的課稅の主張者（一）

金原賢之助

本編は C. B. Fillebrown, The Principles of Natural Taxation の Part one に基いて超草したものである。

一　序　言

總ての國家の收入を經濟的地代(economic rent)（註一）より得やうとする提案は土地單一稅として廣く知られてゐる。此提案は、斯る地代は社會的產物である即人口の增加と全體としての人民の活動及企業とから生ずる所得の一形態であつて、之を受取る地主の生產的活動及企業から生ずるものではない、と云ふ衆知の說に基いてゐるのである。

單一稅に多少の類似點を有し且右の如き公正の原理又は便宜主義に基いて主張せられた改革の提案は、Ricardo の地代說以前より存したのである。そして是等の改革案は、其基礎とする原理が誤つてゐたとするも、近代的運動の精神と共通性を有する點に於いて研究の價値ありと思はれる。

初期の改革案が採つて以つて基礎となした說は、土地は社會全體としての相續財產である、

（註一）

總ての人々は土地に對して、造物者の賜物としてその原始の狀態に於いて平等の權利を有すると云ふのである。總ての土地に對する總ての人々の此自然的權利の結果として、或人々は個人の土地に對する私有の權利を否認せんとするに至つた、そして相續權を剝奪せられた者に對する不公平を除去せんが爲に定期に土地の分配を爲すか或は之を國有と爲さんことを提案するに至つた。此假設的前提と結論が如何に重要なものであるとしても、其れは自然的課稅の問題には全く關係がない、その上其れは多くの人々に對して其課稅原理を理解するに際して邪魔物となつた。經濟的地代を租稅によつて共有物として社會の擅有に歸せしめんとすることは、斯くの如き地代は社會的產物である、個人の努力ではなく社會の共同的活動に歸因する所得の一形態である、と云ふ事實によつて十分是認さるゝこと、なつてゐるのである。此は經濟的地代の性質と起源とを研究すれば明かとなることである。

土地に對する平等權利の說から地代に對する共有權の思想への推移は實に興味あることであつて、多少の重複も之を陳腐ならしめることは出來ぬ。

Henry George は土地に對する總ての人々の平等權利の『幻』を確認した。併し多くの著述家達は、土地に對する平等權利の利益の分配は人間の代が進むに從つて自ら不可能に終ると云ふことに一致した。之に反して地代の利益は單一稅の下に自働的に必然的に散布せらるゝであらう、加之斯る分配の障害は經濟的地代の增加するに從つて減少するであらう。

無地代の土地の場合には、一方其不可能な分配の利益及他方限界耕作(Margin of cultivation)